母を唄った250の詩篇と語り合う
絵・写真・立体を展示

峰村リツ子（母子）油彩、キャンバス　45・5×38cm

母は蛙です
苗代の土手でおしくらまんじゅうする蛙です
蛇の目が光ります

母は焚き木です
燃え尽きても埋火となり
子をあたため続ける執念の焚き木です

母は生まれました
越の国の農家の家で
朝が震えています

母守唄

母は焚き木です展

展示内容（予定）
『母守唄 母は焚き木です』詩篇　相澤弘邦、石山与五栄門、梅田恭子、漆山昌志、木下晋、栗田宏、斎藤應志、佐藤公平、佐藤清三郎、佐藤哲三、七里知子、しんぞう、髙橋まゆみ、戸川淳子、蓮池もも、松永伍一、峰村リツ子、横山蒼鳳、渡辺隆次 ほかの絵画、写真、立体

2024
2/15［木］
↓
3/24［日］

休　月曜日 2/27・3/21

9：00-19：00（2月）
9：00-21：00（3月）

「母をめぐって」（トークと対談）
3/3（日）14：00〜15：30
国見修二（詩人）
西舘好子（日本子守唄協会理事長）
＊詳細は裏面

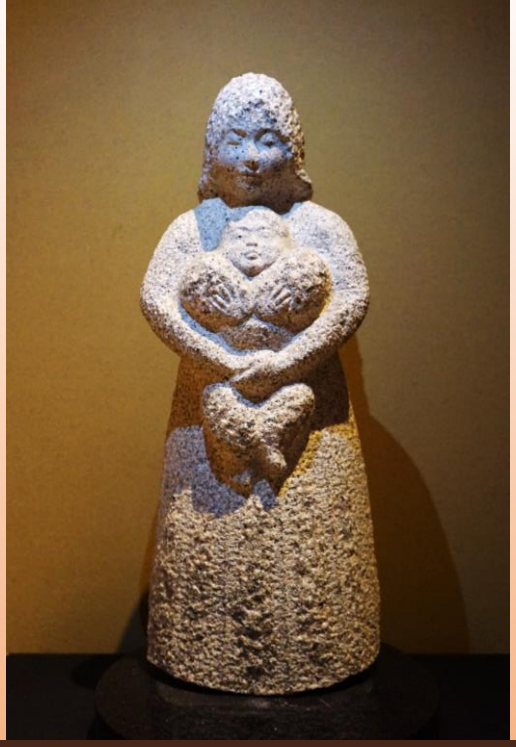
観覧無料

主催・会場
砂丘館
旧日本銀行新潟支店長役宅

『母守唄　母は焚き木です』展

2024年
2月15日（木）～3月24日（日）

休館日　月曜日、2月27日、3月21日
開館時間　9時～19時　＊3月は21時まで
観覧無料／主催・砂丘館



漆山昌志「バイバイ」2000年頃 石彫 51×20×14cm

『母守唄　母は焚き木です』は国見修二の二〇一九年の詩集で、毎週著者に手紙を書いてくるという刊行時92歳の母をイメージの核とし「母は△です」の△に、わき上がってきた言葉を次々に入れ込むことで生まれた二五〇篇の三行詩が収録されている。母守唄とあるように、大人になった子が、逆に母を「あやす」ように口ずさむ唄のようにも読める。

男の書き手による母への賛歌として読むと、息苦しく感じる人もあるだろう。

私（著者）の母〇〇の、「私」「〇〇」（固有名詞）が省かれることで、詩の「母」は読み手自身の母、世間や社会の中の母をも喚起するはたらきを持ち始める。

この詩集の「展示」を著者から提案されたとき、ためらいがあったのは、「息苦しく感じる人」について思ったからで、「その人」は私のなかにもあった。

しかし、くり返しひもとくうち、本書は母の解体、とまでは言えないとしてもユニークなイメージの拡張としても読めると思えてきた。具体的な母の記憶を軸にしながら、あるいはそれゆえにと言っていいかもしれないが、既存の概念、役割、理想としての母を、詩の多様な言葉が揺らし、ほぐし、広げている詩集でもある。

さらに思い浮かんできたのが蓮池もも、しんぞう、木下晋など、砂丘館でかつて紹介してきた美術家たちの作品にも、母をモチーフとする重要な作品のあったこと、それらのなかにも詩と同じように、ひとりの現実の母を核としながら、それらを「開く」力があったことだった。詩の言葉と、それらを、同じ空間に並べてみることに興味を感じた。絵に詩の説明や共鳴板としての役割を単純に担わせるのではなく、この詩集のもつ「拡張」作用との協働を、展示という行為によっておこなえるのではないかと考え、著者の提案を受けとめることにした。

「役割としての母」に、ある性と身体の機能を持って生まれた人の人生の自由を縛る一面があり、その一面は当然批判されなくてはならないが、現実に母であった、母である人たちがおこなってきた、おこなっていることの意味を考える課題自体は、そのような批判で消え去るものではない。著者も関心を寄せる問題、現代の子を守ることや子らの豊かな環境を維持し、創ることは、私たちの時代、社会の大きいテーマであり、さらに時がたち、子が逆に保護者だった人たちを守る立場にたつときなにができるかについてもこの詩集は考えさせる。

この詩集が単なる母の賛歌として読まれることは、母を批判する立場の否定にもつながりかねない。そんな危うさを意識しながら、この砂丘館でどのような展示が可能なのか、試みたい。

大倉宏（砂丘館館長）

国見修二（くにみ しゅうじ）
詩人。一九五四年新潟県西蒲原郡潟東村（現新潟市）生まれ。詩集に『鎧潟』『青海』『雪蛍』『瞽女歩く』『詩の十二カ月』『瞽女と七つの峠』『剣道みちすがら』『母は焚き木です』など。『鎧潟』は生家の近くにあった蒲原平野最大の潟（湖）の一つ鎧潟（一九六六年全面干拓により乾陸化した）の記憶をもとにした詩集。連作詩「母は焚き木です」は日本子守唄協会の季刊誌「ららばい通信」に一部掲載されたものを、二〇一九年に一冊にまとめたもので、序文を同協会理事長の西舘好子が執筆、表紙・挿画に国見が敬愛する詩人松永伍一の絵が使われている。近年は蒲原平野の畦のいたるところにあったはさ木の魅力発信をおこなう。越後瞽女についての著作も多い。

国見修二詩集
『母守唄 母は焚き木です』
二〇一九年 玲風書房

「母をめぐって」（トークと対談）

3月3日（日）14時～15時半

「詩集『母は焚き木です』と本展について」大倉宏
対談　国見修二＋西舘好子（日本子守唄協会理事長）

定員40名　参加料500円
申込　電話・ファックス 025-222-2676
Eメール yoyaku@bz04.plala.or.jp
＊ファックス、Eメールでお申込の場合はお名前、連絡先（電話番号）、人数を記してください。
＊いただいた個人情報はこの催しに関するご連絡以外には使用しません。

申込み受付開始日　2月7日（水）9時～（Eメールも）

新潟駅万代口より浜浦町線C2系統又は観光循環バス「西大畑坂上」下車徒歩1分
砂丘館には駐車場がありません。また、周辺の道路は駐車禁止です。公共交通機関をご利用ください。
新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は駐車券提示にて1時間分の無料券を差し上げます。

砂丘館
旧日本銀行新潟支店長役宅
指定管理者：新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体
新潟市中央区西大畑町5218-1

〈私たちは砂丘館を応援しています〉
㈲ちゃられ 株式会社　NSGグループ　新潟ビルサービス　丸屋本店　㈱田金屋　WIND　郷土の文化に親しむ会　書斎gallery　片桐奈保美　田中太一